村のチカラ

1 自立選択・長野県売木村

# 祭り復活させ文化守る

# 顔見知りばかりが一番

中央アルプスと南アルプスの山々に囲まれた長野県売木村。その春は伝統のお練り祭りで始まる。

豊作を祈願して、若者が舞いながら太鼓をたたき、神社まで練り歩く。今年はあいにくの大雨で、村内のホールでの奉納。それでも、赤いたすきが床に届くほど体を後ろにくねらせる動的な舞いに、愛好家が一斉にカメラのシャッターを切る。

村役場職員有志とともにおはやしを担う松村増登村長は「文化を守れなくて、村としての自立はあり得ない」と語る。

お練り祭りは「舞い手になれば嫁が来る」といわれ、かつては若い男性が競って参加したが、人口流出のため一九八〇年にいったん途絶えた。しかし、当時四十代だったリンゴ農家の松村一孝さんらが「このままじゃ、村にはなんにもなくなってしまう」と七年後に復活させた。

現在、村の人口は七百人足らず。全国の市町村で五番目に少ない。平成になって隣接自治体との合併話が持ち上がったが、「先人が築いた互助精神や豊かな自然を生かした社会を目指す」（松村村長）と自立を選んだ。

お練り祭りのクライマックス。太田稲荷神社の前で、若者が舞を奉納する＝07年3月、長野県売木村（同村提供）

村の振興計画のサブタイトル「負けるな売木」が自立への意気込みを示す。税収が減る中で、役場職員の削減などを限界まで進め、農業や温泉観光の活性化に知恵を絞る。幸い、村出身でない人が移住してくる「Iターン」は増加傾向だ。

売木村を含む飯田・下伊那地域（南信州）は、村が密集している。平成の市町村合併で、行政単位としての村は全国で二百弱まで激減したのに、ここは十一も残る。

「南信州は平地が少なく、村落は谷筋にあるため、地形的に合併が難しい。農民歌舞伎などの伝統芸能が盛んで、住民の地域に対する誇りが強く、自立心が旺盛だ」。今年三月まで、同地域を管轄する長野県の下伊那地方事務所長だった田山重晴さんは分析する。

域内には、少子高齢化で消滅が避けられない「限界集落」が多い。だが、同事務所はそれを「生涯現役集落」と名付け、独自の観光ガイドブックを作製、励ましている。

「『限界集落』は東京・霞が関で使う言葉。実際に人が生きている所には、そんな悲しい言葉はない」と田山さん。長野県飯田市から愛知県経由で浜松市に至る三遠南信自動車道が開通すれば、交通アクセスは大幅に改善され、都市部との交流が増えると期待する。

今年のお練り祭りで舞い手を務めた地元の高校生は、笑顔で言った。「この村の大きさがいい。ほとんどの人が顔見知りで、一番落ち着く」

◇　◇

単独存続にこだわる自治体としての村があれば、行政区画と無関係に「村」をうたう動きも目立つ。現代人にとって村はどんな意味を持つのか、探ってみる。

今年のお練り祭りの後、村民が一堂に会した直会（なおらい）。祭りを復活させた松村一孝さんが、舞い手の高校生らの労をねぎらった＝3月、長野県売木村